

# 『チャタレー卿夫人の恋人』と現代

——ロレンスの描く不倫の特異性について——\*

---

山田晶子

---

## 序

性の解放は、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) の文学作品の主要なテーマの一つである。現代は、性の解放が進んでいると一般的に考えられているが、ロレンスが唱えた性の解放とは方向がかなり異なっていると思われる。そのため、英文学研究においてロレンスが占める重要性は、今なお非常に高いものである。英文学研究あるいはロレンス研究においても、ロレンスの研究論文集は、21世紀の今、国内外において絶えず出版されており、特に『チャタレー卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*)の研究論文は、それらの研究論文集にいつも収録されている。2003年に第9回国際ロレンス学会が日本で開催され、そのとき発表された論文を収録している研究書が、2004年及び2005年に出版されたが、『チャタレー卿夫人の恋人』研究論文が必ず入っている。性の解放が進んだと思われている21世紀の現代においても、文学上のそのテーマの先駆者であるロレンスが、今なお盛んに研究され続けている原因は何なのであろうか。

21世紀の現代、性の解放が進んだということはある面では大変有難いことだと思われるが、他方では性の商品化も進んでおり、これは非常に危険なことである。ロレンスは、この「性の商品化」ということには嫌悪を示している。人間、いや生きている全ての生物にとって根源的な問題である性は、文学の永遠のテーマであると思われる。そしてその旗頭になったロレンスの『チャタレー卿夫人の恋人』について、改めて考えてみたいと思う。

さて、『チャタレー卿夫人の恋人』のテーマは不倫であり、不倫の定義は『広

辞苑』によると「人道にそむくこと」(2277)であるが、特に、男女の関係において既婚者が、伴侶以外の人間と性的な関係を結ぶことを指している。不倫あるいは恋愛は、戦争と並んで文学の主要テーマに数えられる。世界的に有名な不倫をテーマとする小説として、19世紀に書かれたギュスターヴ・フローベール (G. Flaubert) の『ボヴァリー夫人』 (*Madame Bovary*)、トルストイ (Lev N. Tolstoy) の『アンナ・カレニナ』 (*Anna Karenina*)、及びナサニエル・ホーソーン (N. Hawthorne) の『緋文字』 (*The Scarlet Letter*) がある。これらは19世紀に書かれた不倫をテーマとする代表的小説であるが、20世紀に書かれた不倫をテーマとする小説の代表としてロレンスの『チャタレー卿夫人の恋人』が挙げられる。ここで、前3作品と『チャタレー卿夫人の恋人』との違いを5点挙げようと思う。

- ① 前3作品では、主人公の男女2人が所属する階級が、上・中流階級で同じである。しかるに『チャタレー卿夫人の恋人』では、男女つまりメラーズ (Mellors) とコニー (Connie) の所属する階級が下層階級と上流階級であるという違いがある。
- ② 前3作品では主人公は主として男性よりも女性である。しかるに『チャタレー卿夫人の恋人』では、主人公はどちらかといえば男性メラーズである。
- ③ 前3作品では、主人公の男性または女性のどちらかが死ぬという結末を迎える。しかるに『チャタレー卿夫人の恋人』では、男女二人ともが生き延びている。メラーズとコニーが結婚するだろうという希望が溢れている。
- ④ 前3作品では赤裸々な性描写はない。しかるに『チャタレー卿夫人の恋人』には、芸術か猥褻かをめぐって裁判まで引き起こした赤裸々な性描写とタブー語が書かれている。
- ⑤ 『チャタレー卿夫人の恋人』には、前3作品には描かれていない恋人の男女の葛藤が描かれている。

ロレンスは、なぜこのような5つの新しい視点で小説を書いたのであろうか。それは、彼はメラーズとコニーの不倫を、世間が考えるのとは違って非難しているのではなくて、賞賛しているためである。そして、ロレンスは、二人の不

倫関係を現代機械文明批判とすべく書いたためである。つまり二人の不倫の物語は、単なる恋愛物語ではなくて、現代の悲劇を救うためにはどうすればよいのかを問う、人間のあり方を世に問うという社会問題を取り入れているのであり、いわば不倫だけではなくて社会問題を濃厚に含んだ不倫小説であると考えられる。それゆえに、『チャタレー卿夫人の恋人』は、これまでしばしば言われてきたような逃避的文学ではなくて、またこれまでよく言われてきた寓話的物語ではなくて、リアリズム小説の要素がかなり入っていると言える。

## I 現代の悲劇性

冒頭の文章で有名な小説は多々ある。たとえば日本文学では川端康成の『雪国』<sup>1</sup>や夏目漱石の『我輩は猫である』<sup>2</sup>などがあり、外国文学ではチョーサー (G. Chaucer) の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)<sup>3</sup>やダンテ (Dante) の『神曲』(*The Divine Comedy*)<sup>4</sup>がある。不倫がテーマの『アンナ・カレーニナ』の、「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」(5) も有名である。そして『チャタレー卿夫人の恋人』の冒頭の文章 “Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically.” (「現代は本質的に悲劇の時代である。だからこそわれわれは、この時代を悲劇的なものとして受け入れようとしないのである。」)<sup>5</sup>も、非常に有名である。ここで冒頭の文章の2つの節を結合している接続詞 “so” (「だからこそ」) には、ロレンスの戦いの強い決意が感じられる。普通なら “but” (「しかし」) とするべきところである。初稿では “Ours is essentially a tragic age, but we refuse emphatically to be tragic about it.” (FSLCN 7) であり、「しかし」となっている。一方、第2稿では “so” に変化している (FSLCN 223)。「だからこそ」としたほうが、読者に与えるインパクトが強いのである。そしてこの冒頭に書かれている内容は21世紀を生きる我々の状況にもまさしく当てはまっていると言えるであろう。

ロレンスは、現代の悲劇を生き延びる人間としてメラーズとコニーという男女を主人公として設定しているが、彼らが戦うべき相手は何なのであろうか。最初にロレンスが『チャタレー卿夫人の恋人』を書いたときの時代背景につい

て述べよう。彼がこの小説を書き始めたのは1926年10月の下旬であったということが研究上言われている。『チャタレー』連作には3つの原稿があり、初稿が書かれたのが1926年10月～11月、第2稿が書かれたのが1926年12月～1927年2月であり、最終稿が書かれたのが1927年11月～1928年1月で、出版されたのが同年7月初旬であった (LCL; xx-xxiv)。しかしイギリスでは猥褻の廉で没収される可能性があり、1960年までは削除版しか出ていなかった。そして1960年にペンギンブックスが無削除版を出版し、そのために裁判が行われたのだが、無罪になった。

『チャタレー卿夫人の恋人』の時代背景は第一次世界大戦が始まる直前から終戦6年後頃までで、ストーリーの中心時期は1920～24年頃である。1885年9月に生まれ1930年3月に44歳で亡くなったロレンスは第一次世界大戦を体験した。兵隊として戦ったわけではなかったが、徴兵検査を受けたり、妻のフリーダ (Frieda Lawrence) がドイツ人であったためにスパイの嫌疑をかけられたりして、辛酸の思いを味わった。この苦い体験は1923年出版の『カンガルー』 (Kangaroo) という小説に書かれている。彼は戦争反対の立場を取っており、このことは『チャタレー卿夫人の恋人』にも書かれている。ロレンスは言葉つまり論理が支配する現代社会を、人間から有機的な生を剥奪するものとして厳しく批判した。なぜなら、戦争では、人間はまさしく機械の歯車のように扱われるからである。論理が極端に生活を支配すると、人間は憎悪によって動くようになるのである。そしてイギリスでは階級間及び個人と個人の間意思疎通の障害が生じていた。『チャタレー卿夫人の恋人』から引用すると、“Even an organism is bourgeois: so the ideal must be mechanical. The only thing that is a unit, non-organic, composed of many different yet equally-essential parts, is the machine. Each man a machine-part, and the driving power of the machine, hate: hate of the bourgeois!” (「有機体でさえもブルジョワ的になっているので、理想というのは機械的になるに違いない。単位であり、非有機的であり、部分から成立している唯一のものは機械である。どの人間もが機械の一部品であり、その機械を動かすものは憎悪である」LCL38) と、ロレンスの考え方を代弁しているトミー・デュークス (Tommy Dukes) は言っている。

そして言葉にはもう真の意味がなくなっているとロレンスは考えた。話すということだけの生活は頭脳中心の精神生活であって血と肉の通わないものであり、これは現代ではどうしようもないほど極端になっているため、アナーキーであると言えるのである。彼は、1925年6月6日にトリガント・バロウ (Trigant Burrow) へ宛てて書いた手紙において、人間が真に創造することができる意識は血液の奥深い鼓動から生じるのであるが、世間はそれを受け取ろうとしない、と嘆いている (*Letters* V 262)。また「『チャタレー卿夫人の恋人』について」 (*A Propos of Lady Chatterley's Lover*) のなかでも「生に向かう新しい衝動は、血の接触によって初めて生じる」 (*LCL* 327) と述べている。このように、ロレンスにとって血と肉というものは、真の生にとっては欠くべからざるものなのである。しかしコニーにとっては、ラグビー邸での生活は、血と肉が欠けていて頭脳中心の精神生活しかなく、彼女は偽りの生の中で生きているのである。彼女は次のように考える。“All the great words, it seemed to Connie, were cancelled for her generation: love, joy, happiness, home, mother, father, husband, all these great dynamic words were half-dead now, and dying from day to day.” (「全ての偉大な言葉はコニーの世代にとってはなくなってしまっている。愛、喜び、幸福、家庭、母、父、夫、これらの全ての偉大な躍動的な言葉は今では半ば死んでいた。そして日々死に絶えつつある。」 *LCL* 62) 古代では、引用の中の「偉大な躍動的な言葉」には、実体があったということである。つまり言葉が人間の生身の肉体と血に繋がっていたのである。しかし現代ではこれらの偉大な言葉は血と肉を欠いていている。

上記引用における言葉の形骸化に対するコニーの悲しみはロレンスのものに他ならない。彼は1929年出版の「『チャタレー卿夫人の恋人』について」において、宇宙の律動と人間の生は呼応しているはずであり、人間の最大の欲求は魂の持つ永遠の歳月を絶えず新たにしていくことであるが、このような欲求を言葉だけによって満たそうとしても何の意味もない、と述べている (*LCL* 329)。そして言葉つまり論理的精神を重視する現代人の破壊的横暴さをロレンスは第1作『白孔雀』 (*The White Peacock*) から最後の長編である『チャタレー卿夫人の恋人』に至るまで書き続けた。そして論理による機械的な生活の横暴

さを打ち壊すには、男女の真の性愛関係を確立することが大事である、と考えた。つまり性愛の賛歌はそのまま現代機械文明批判となっており、またこの問題点を解決する手段として描かれているのである。「『チャタレー卿夫人の恋人』について」において、ロレンスは、現代のほとんどの性は冷え冷えとしていて温かさが欠けており、血とは関係のない神経の問題に墮しており、このような神経症的な欲望に強要された接触は摩擦を生じさせて破壊的なものになる、と現代人の性関係のあり方に警告をしている（LCL 326-7）。性行為がいまや機械的になっているが、現代人は性についてもっと考えなければならない、性の行為と思考とが調和を保つことが必要である、と述べている。それは性に対して正当な敬意を払うことである、と述べている（LCL 308）。

現代では有機的な生き方が徐々に少なくなってきた。機械文明の横暴さは、2006年という現代にも当てはまり、ロレンスの時代よりも更に悪化していることはロレンスの死んだ後の時代に、核兵器が発明されたということからも明白である。かくしてメラーズとコニーが戦っている相手は機械文明の横暴さと、それがもたらす金を何よりも重視する拝金主義の人間たちであると言える。つまり論理あるいは精神主義重視による現代文明が温かで有機的な人間関係を奪い、その結果として人間のつながりがなくなって冷たい状態になっていることが現代の悲劇と言え、ロレンスはこの冷たい人間関係を温かなものにしたと考えていたのだと思われる。

## Ⅱ 白い世界

### ① 白い女性

ロレンスは、その時代の女性の生き方に反発を感じていることを第1作の『白孔雀』から書いている。その女性たちは「白色」のイメージに包まれていることが多く、「白色」を特徴とする。ゆえにこれらの女性たちを「白い女性」として捉えることができる。『白孔雀』では、女主人公のレティ（Lettie）は語り手であるシリル（Cyril）の姉であり、中流階級の教養ある女性である。彼女は、農夫である無教養な主人公ジョージ（George）の素朴な人柄と男性的な

魅力に惹かれながらも、中流階級のレズリー (Leslie) を夫に選ぶ。彼女はジョージに未練があったが、農民の不安定な生活よりも中流階級のレズリーとの安定した生活を選んだのである。一方レティに振られたジョージはアルコール中毒になって敗残者となる。シシルの目を通して、ロレンスはジョージに対して限らない愛惜を注いでいる。レティは男性を苦しめ最後には破滅させる女性であり、ロレンスは彼女の肌の白さや服の白さを強調して描き、白さを特徴とする女性つまり「白い女性」として描いている。

第2作目の『不倫』(*The Trespasser*)においても、女主人公であるヘレナ (Helena) は、「白さ」を特徴としており、不倫相手のシーグモンド (Siegmund) を自殺に追い込む。「白い女性」は精神性の強さを強調されていて、彼女たちは男性の肉体を嫌悪し正常な性愛を嫌悪する存在として描かれている。それゆえに男性たちは彼女たちによって苦しめられ、破滅させられるのである。

第3作目の『息子と恋人』(*Sons and Lovers*) では、女主人公の一人であるミリアム (Miriam) は、主人公ポール (Paul) の性愛を真から受け入れることができず、最後には彼に捨てられる。ポールが彼女に破滅させられなかった点に、男性の進歩が見られる。このような「白い女性」はなぜ男性の肉体を嫌悪するのかという原因として、ロレンスはキリスト教の影響であるとして、手紙でもまた小説中でもキリスト教を厳しく批判している。<sup>6</sup> そしてキリスト教に対抗して彼が信奉するようになったのは、ギリシア・ローマ神話に登場する異教の神、パン神 (Pan) である。パン神は脚がヤギであり、上半身と顔は人間であるが角が生えている姿として想像され絵画にも描かれている。パン神は、第1作目の『白孔雀』から、すでに森番アナブル (Anable) を喩えるものとして登場し、『チャタレー卿夫人の恋人』でも主人公である森番メラーズはパン神を崇拝している。

## ② 白い男性

「白い世界」というのは、「白い女性」が所属する世界つまり言葉と論理が支配する世界であり、ロレンスが批判する精神世界つまり現代機械文明の世界である。『チャタレー卿夫人の恋人』の第19章つまり最終章で、メラーズがコニーに宛てて書いた手紙にはロレンスの代弁者であるメラーズの機械文明社会に対

する憎悪がにじみ出ている。

I'm frightened, really. I feel the devil in the air and he'll try to get us. Or not the devil-Mammon; which I think, after all, is only the mass-will of people, wanting money and hating life. Anyhow I feel great groping white hands in the air, wanting to get hold the throat of anybody who tries to live, to live beyond money, and squeeze the life out. (LCL 300)

この引用で、金を欲しがらる現代の拜金主義者の意志が“white hands”として「白色」で表現され、彼らが中心となっている西洋機械文明は「白さ」で表わされている。「白い」人間は、女性のみに限らず、ロレンスは、男性登場人物の中でも精神的な生き方に偏った男性たちを白のイメージに包まれている人間として描いている。彼らは白い髪や白い服を特徴としているため、「白い男性」として捉えることができよう。この世界を代表する男性として『恋する女たち』(Women in Love) に登場するジェラルド (Gerald) が挙げられ、更に同質の男性として『チャタレー-脚夫人の恋人』のクリフォード・チャタレー (Clifford Chatterley) が挙げられる。クリフォードは、コニーの夫で、准男爵であり上流階級の人間である。彼はイギリスのダービシャー (Derbyshire) 地方の炭鉱経営者である。つまり支配階級に属する。現代のイギリスでは、貴族階級とそれ以下の階級の社会的・経済的差は縮まってきたようであるが、第二次世界大戦前までは、その差はなおも大きいものであった。

さて、クリフォードは、第一次世界大戦に従軍し、その際に下半身をひどく怪我して麻痺してしまうが、これはこの小説の重要な点である。つまりクリフォードは性的に不能状態になったのである。29歳であった。そしてこのときまだ新妻であったコニーは23歳であった。二人の間には子供つまりラグビー郎の跡継ぎが生まれていなかったのだが、性生活はできなくなってしまったのである。広大なラグビー郎の中で数人の召使以外は誰もいないクリフォードとだけの生活に、若いコニーが心身蝕まれていく状況が第9章まで書かれている。クリフォードの存在が否定されていることは、彼が「骸骨」の白さに喩えられ、



コニーには「骸骨が自分を掴もうとしている」(LCL 194-5)と感ぜられることから分かる。骸骨は血と肉が全くない存在であり、ロレンスが重要と考える人間のあるべき存在性とは正反対のものである。

クリフォードが下半身麻痺になったのは戦争のせいであり、この点においてロレンスは戦争を批判している。彼は炭鉱経営者であり裕福であり名声のある支配階級の間人であり、イギリス最高知識人階級に属している。炭鉱を現代的に機械化して効率と莫大な利益を上げようとするクリフォードを、ロレンスは現代機械文明の権化として描き、批判している。クリフォードは拝金主義者であり、金の神マモンの「白い手」で、血と肉を持った人間を窒息させようとしている否定的な存在なのである。

クリフォードは下半身麻痺のために性生活ができない男性であるが、彼は体が健全であったときから性生活を重視しない男性であった。この点がロレンスの言わんとするポイントである。つまりクリフォードは血と肉の温かさを欠いている男性である。そして彼は、コニーに対しては、跡継ぎを生むためには他の男性と性的な関係を持ってもよいと言って、コニーの感情を傷つける。彼は冷たい人間であることが強調され、水中に生息する蟹や海老のような甲殻類にたとえられている。ロレンスは、論理に生きる人間というのはあまりに純粹であろうとするので、かえって真実の存在であることができないのだ、と言っていると思われる。そして論理的に最高点にまで達した人間は、ネジが壊れて機械が壊れるように壊れ、更にイディオットのようになる。クリフォードが達した状態はこのようなものであった。意識の機械化がたどり着いた結果である。コニーが求めている温かさは、クリフォードが属する階級の間人や知識人にとっては悪趣味と思われた。ロレンスは、トリガント・パロウに宛てた1927年8月3日の手紙において、「愛とは、頭脳による認識以前の問題であり、厳格に言えば精神を持たないものであり、知恵の木の實以前の問題である」(Letters VII 114)と述べている。つまり、ロレンスは、現代の間人は知恵の木の實を食べて精神生活を送っていて、もぎ取られた林檎であると言っているのである。そのため人間同士の間で温かさが欠けているのだが、その冷たい人間の代表がクリフォードなのである。

『白孔雀』において、森番アナブルが精神的な人間に対して嫌悪を示しているように、また *The Man Who Died* (『死んだ男』) の蘇った男 (キリスト, Christ を指す) が、言葉による人生を捨てて肉体の人生を選ぶことから分かるように、言葉が象徴する精神主義への反発は『チャタレー卿夫人の恋人』にも中心テーマとしてある。“Chatterley” という名前に含まれる “chatter” (「くだらないことをしゃべる」) という響きは、クリフォードがお喋り (chirpy) であると書かれているように、“chatter” する人間つまり精神主義に溺れて墮落した人間を象徴していると思われる。

### Ⅲ 黒い男性メラーズ

コニーは、チャタレー家に関わる人々と真の関係を持ってないで、神経を病むようになる。彼女は、男性と真の関係を持ってないで悩む現代女性の代表のごとく描かれている。しかし、彼女を救う男性メラーズが彼女の前に登場する。クリフォードのラグビー邸のパークに隣接して広大な森があり、メラーズはこの森を守る森番をしている。「白い男性」に対立する存在としてのメラーズは、「黒い男性」として登場する。「黒い男性」は、ロレンスの他の作品でもたびたび登場しているが、彼らは下層階級に属する人間として描かれていたり、また中・上流階級に属している場合でも既成の価値観及び社会体制に批判的でそこから脱出しようとするタイプとして描かれている。そして顔色や髪が黒い男性というように黒いイメージで描かれている。

#### ① メラーズと植物との関連

真の接触がないという恐ろしい無と孤独の生活、生きながらにして死んだような生を送っているコニーは、クリフォードの世話をするためにやってきた看護婦ボルトン夫人 (Mrs. Bolton) の勧めもあって森へ頻繁に出かけるようになる。森でコニーはメラーズと深い関係になってゆく。メラーズは彼女を救い出す戦士であるように書かれている。第1回目の出会いでは、彼は暗緑色の服を着ていて彼女を攻撃するように脅かすようにどこからともなく登場し、まる

で森の精霊のようである。森の中には花や木が溢れている。メラーズが体を洗っているときのコニーは偶然その場面を遠くから垣間見るのであるが、この時のメラーズの大変孤独で純粋な姿から、コニーは子宮にショックを受け、メラーズは彼女の新生のきっかけを作る。多くの植物のうちでも、メラーズは特に松の木と関連付けられている。ロレンスは「アメリカのパン神」(*Pan in America*)というエッセイで、ロッキー(Rocky)山脈のふもとの小さな牧場に松の木が守護霊のように立っているが、この木はパン神に包まれていると書いている(*Pb* 24)。このように松の木は、パン神と関連しており、『世界シンボル大事典』によれば、シンボリックに「生命力」(921)あるいは「顕現した真理」(921)というものを意味している。

第8章で、コニーはメラーズの住居のそばに立っている松の木の根元に腰を降ろしてもたれかかる。この木は彼女を“curious life, elastic and powerful rising up”(「弾力に満ちた力強い不思議な上昇する生命」*LCL* 86)で揺り動かす。メラーズの小屋のそばに立っているので、この松の木は彼の守護霊のように思われる。このように、メラーズは、植物、特に松の木と関連して書かれている。

## ② メラーズと動物との関連

「黒い男性」たちは、動物によく喩えられている。たとえば『恋する女たち』の主人公の一人であるバーキン(Birkin)は、カメレオンに喩えられているが、このことは彼がカメレオンのように変化する柔軟性を備えていることを示し、機械の硬さ及び機械的な人間に対立していることを表している。メラーズは馬が好きでありまた“a weasel playing with water”(LCL 66)と、イタチにも喩えられている。そして彼はフロッシーという犬を飼って可愛がっている。ロレンスの作品に登場する代表的な動物は蛇であり、ラグビー邸の森ではワラビが蛇のように頭をもたげ、コニーに秘密を囁くようであると書かれているが、この場合の蛇はエデンの園の蛇を思わせる。しかしラグビー邸の森はエデンの園とは性質を異にしている。というのは、コニーに性愛の喜びを教えるのがラグビー邸の森であり、その性愛というのは反キリスト教的であるからである。

### ③ メラーズと炎との関連

ロレンスの作品では、主人公たちは北国よりも南国を志向する。たとえば『恋する女たち』では、パーキンとアーシュラ (Ursula) は、雪と氷に包まれたインスブルック (Innsbruck) に嫌気がさして、最後にはイタリア (Italy) を目指す。ロレンスは、1924年10月8日にキャサリン・カーズウェル (Catherine Carswell) に宛てて書いた手紙において「冬はいやです。ここでは北方民族ということで気炎をあげていますが、そんなものは死、死、死以外でないと信じています。私は北からくるものはみな憎いのです。」(Letters V 148) と述べている。ロレンスはイタリア、オーストラリア、メキシコ、アメリカのニューメキシコ州を旅しており暖かい場所を好んだことが経歴からも分かるが、それは彼が北方文明の基調となっているキリスト教文明を憎んでいたことが原因なのである。それゆえに彼は異教文明の発祥地である南方を目指したと言える。この異教志向・南方志向が『チャタレー卿夫人の恋人』にも見られる。黒い男性であるメラーズは炎と関連付けられていて、コニーは、初めてメラーズの裸体を見た時“the warm flame of a single life”(「自立した人生を生きている温かな炎」LCL66) のようである、と思う。炎はまさに南国の象徴である。そしてロレンスは、性愛において炎を重要な喩えとして使用している。

And necessary, forever necessary, to burn out false shames and smelt out the heaviest ore of the body into purity. With the fire of sheer sensuality. (LCL 247)

引用から分かるように、火あるいは炎は偽りを燃やす道具なのであり、そしてメラーズは「炎」を信奉すると言っている (LCL 300-1)。クリフォードが水中に生きる冷たく硬い甲殻類に喩えられているのに反して、メラーズは炎を信奉する温かな人間として描かれているのである。

### ④ メラーズと闇との関連

メラーズに代表される黒い男性たちは闇を愛している。この闇は性愛の神である「黒い神」の存在する場所である。「黒い神」は男根的自我を通して感じ

取られる神であると、『カンガルー』では書かれている(K134-5)。すなわち「黒い神」は精神性を重視するキリスト教の神とは異なり、肉体を重視する神である。黒い神には異教の神々が属していて、それはキリスト教社会及び機械文明社会の象徴である人工的な光と対立している。光が横暴なこの現代世界にロレンスは闇を復権させようとしていて、その思想を表わす黒い神の使者が黒い男性なのである。彼らは白い女性を黒い世界へすなわち真の性愛の世界へ誘う男性たちであり、メラーズもその一人である。

『チャタレー卿夫人の恋人』は、後半になるにしたがって、森が闇と関連付けられてゆき、同時にメラーズと関連付けられてゆく。たとえば“the dark cottage”（「(メラーズの) 暗い小屋」LCL 119)，“He loved the darkness and folded himself into it.”（「彼は闇を愛していたので、その中に包まれた」LCL 120），“The drizzle of rain drifted greyly past, upon the darkness. It was quite dark.”（「雨が闇の上に灰色っぽく滴った。全く暗かった」LCL126），“She plunged on in the dark-grey, tangible night.”（「コニーは濃い灰色の中に触れることができる夜の中に飛び込んだ」LCL 128），“the voice out of the uttermost night, the life-exclamation”（「究極の夜からの叫び声、声にならない命の声」LCL 134），“in the darkness of the wood”（「(彼は) 森の闇の中に (いた)」LCL 196）というように。

そしてメラーズがコニーに宛てて書いた最後の手紙で，“So I believe in the little flame between us. For me now, it's the only thing in the world.... We'll really trust in the little flame, and in the unnamed god that shields it from being blown out.”（「僕は二人の間に燃えている小さな炎を信じる。今僕にとってそれが世界で唯一の意味あるものだからだ。(中略)そして背後でその炎が消えないようにと守ってくれる名前がない神を信じる」LCL 300-1）と書いている。「名前のない神」とは特定の名前がないということで、いろいろな異教の名前を持っているのであり、その一つがパン神である。黒い神は、性愛の神なので人間の本能を大事にする神であり、ゆえにそれは人間が無意識を崇め、血と肉の生活及び自発性を大切にすることを求める。

ところでメラーズは黒い男性であると述べたが、彼は「白さ」を印象付ける

描写も時にはなされている。たとえば森の中へ散歩に出かけたコニーはメラーズが体を洗っている所を垣間見て子宮にショックを受けるが、彼女の目に彼は“his thin white body like a lonely pistil of an invisible flower!”（「一本の目に見えない花の雌しべのような孤独で細い白い体」LCL 85）と映る。この描写は大変孤独で純粋なメラーズの存在を感じさせるが、この場合彼の体の「白さ」はその自立して確信に満ちた生き方をしている「純粋さ」を表わしている。つまり、「白色」という言葉が、本来の意味でメラーズという男性を表わすのに用いられており、言葉と実体が合致しているのである。このように、ロレンスの作品では、「白さ」が機械的で人工的な生き方を表わす否定的な意味で用いられる場合と、今述べたような肯定的な意味で用いられる場合がある。また「黒さ」も同様に肯定的な場合と否定的な場合（「死」や「腐敗」の意味を表す時）の両面の意味を持って描かれている。これは、ロレンスの思想では矛盾しないことである。なぜならば、ロレンスは二元論を信奉しており、生には光（白）と闇（黒）或いは「女性」性と「男性」性の両面があると考え、またこの二元は常にどちらかが優勢であるがいつも均衡を取ろうとして戦っていると考えている。現代では人工の光つまり精神性が重視され闇が追いやられているため、ロレンスは闇を復権させることが必要であるとして、初期の作品から闇の善性を唱え続けているのである。このことが、彼が「黒」或いは「闇」を強調して書く理由なのである。彼は、『トマス・ハーディ研究』において、「生は動への意志と静への意志との二重の形をとって存在し」（STH 59）ているのであり、この二つの意志の間には完全なバランスとか調和は決してあり得なく、それゆえに人間はバランスを取り戻そうと努力せざるを得ない、と述べており（STH 59）、また、ルネサンス以来「生についてまったく新しい考え方が出てきたが、それは光と闇、物と精神といった相対する二重の存在を認める二元論という概念である」と述べている（STH 83）。しかし彼は、現代のキリスト教文明では光或いは精神の面が強くなりすぎており、また西洋の伝統では光或いは精神を重視しすぎ闇を悪として締め出そうとしたためにバランスが大きく崩れ、人間の存在のあり方が危機的な状況に陥っているとして、彼は闇の存在を重視することを唱えているのである。二元論を唱えるロレンスは、小説の中で人間を描

く場合でも、同一人物をある場合は黒くまたある場合は白く描くことになると考えられるのである。「黒さ」には正負の両面があり、また「白さ」にも正負の両面があるように描いているのである。

#### ⑤ メラーズによるコニーの救済

次に、メラーズと不倫関係になったコニーという女性について考えてみよう。彼女は上流階級の出身ではないが、父親はロイヤルアカデミーの会員であった画家であり、母親はフェビアン協会に所属していた教養ある進歩的な女性であり、彼女と姉のヒルダ（Hilda）は、結婚前から恋人と性的な関係を持っていた。新しい思想を男性と自由に語ったコニーは、時代の新しい女性と考えられる。

しかし、コニーには慎ましやかな点があり、柔らかで傷つきやすい優しさを備えている。このようなコニーを、メラーズはヒヤシンスのような女性であると思う。彼女はメラーズの内面の美しさを感じ取ることができる女性である。コニーに対立する女性たちとして登場しているのが、姉のヒルダや看護婦のボルトン夫人や、メラーズの別居中の妻バーサ・クーツ（Bertha Coutts）である。彼女たちは支配欲と意志が強くてアマゾン（Amazon）とかミネルヴァ（Minerva）に喩えられている。コニーが傷つきやすく繊細なヒヤシンスに喩えられているのに反して、彼女たちはゴムや金属のブリキでできた女性として描かれ、そのタフネス（toughness）が強調されているが、この場合、ロレンスはタフネスという言葉を否定的に用いているのである。

コニーは第10章で、メラーズが世話をしている卵から孵ったばかりの雛の雛を見てその生命力に溢れた姿に涙を一粒落とす。コニーの手のひらに乗せられたその雛は“its atom of balancing life trembling”（「均衡を持って震えている生命の原子」LCL 115）と書かれている。ロレンスのキーワードの一つである「星の均衡」（“star-equilibrium”）がここに表現されている。「震えている」のは、いつ均衡が壊れるかもしれないからである。「星の均衡」という言葉は、『恋する女たち』においてパーキンがアーシュラに説明する言葉で、星々が互いに均衡を保ちながら繋がっているように、男と女も互いに均衡状態を持つべきだ、

という思想である (WFL 148)。この思想は前に述べた二元論の思想である。

クリフォードとの4、5年に亘る結婚生活において、コニーはあまりにも精神生活、論理の生活、そして光の生活にはまりすぎ、均衡がない生活を強いられたため神経を病んでうつ状態に陥ってしまったのだが、メラーズとの性的な関係を持ったことで蘇ることができた。彼女は、クリフォードとの結婚後に、メラーズと関係を持つ前にマイクリスという成功した作家と短い期間性的なつながりを持ったが、彼はコニーを真に蘇らせることはできなかった。金も名声もあるマイクリスは、女性には金、宝石、大邸宅、自由な時間を与えれば幸せになるのだ、と考えており性というものをあまり重視していなかったし、性交においてひどい言葉をコニーに浴びせて彼女を傷つけ、そのためコニーは永遠に彼とは決別する決心をしたのである。

一方、メラーズは、金も名声も地位もない男性であるが、他の男性たちと違って、コニーを本物の女性として扱ってくれたのであった。この扱い方は、彼の持つ“tenderness”(「優しさ」LCL 251)という言葉で表わされている。彼はコニーの「女性」に対して優しかったのである。「優しさ」はロレンスのキーワードの一つで、人間同士の真の関係を築くために必要なものである。ロレンスは、『チャタレー卿夫人の恋人』において、性愛の意味を宇宙とのつながりを体験することであると述べている (LCL 324)。その結果究極の女と男になるのが性愛の意味であると考えた。この究極性は『恋する女たち』において、「星の均衡」と関連して、シングルネス (単独性) という概念で表わされている (WFL 151-2)。メラーズはこの「シングルネス」を達成していると考えられる男性像である。

コニーは、小説の前半では森へ出かけても、森は神秘的で何かを秘めているようではあるが、ただ沈黙しているだけの存在でしかないと思っていた。しかし彼女がメラーズと関係を深めるに従って、森は様々な音や匂いに満ちて生命力を帯びてきたものと描写されている。彼女の森との関係はどんどん深まってゆく。例えば “She was like a forest, like the dark interlacing of the oakwood, humming inaudibly with myriad unfolding buds.” 「彼女は森のようなものだった、無数の蕾を開いてゆくとき耳に聞こえなくハミングを口ずさむ暗く繁った檜の



木のようにであった」LCL 138)と表現されている。

ロレンスが考える理想の性愛の形を、メラーズのリードによってコニーは知ることになり、ロレンスがエドワード・ガーネットに宛てた手紙に述べている「新しい自己」(“another ego”)を達成するのである(Letters II 183)。コニーはメラーズによって、普段自分では気づいていないが内部に存在する真の自己を知らされたのである。

Connie went slowly home, realizing the depth of the other thing in her.  
Another self was alive in her, burning molten and soft and sensitive in her womb  
and bowels. (LCL 135)

「自己の内の他者」や「別の自己が彼女の中で生きていた」という表現に、新しいコニーという女性が生まれたことが分かる。ヒヤシンスの花は、楽園に咲く花であるとシンボル上考えられている。<sup>7</sup> 理想の性愛こそが永遠の命をもたらすものだとロレンスは性を捉えていると思われる。

#### IV リアリズムについて

『チャタレー卿夫人の恋人』が1928年に出版されてから現在に至るまでに、メラーズは非人間的な森の権化であり非現実的な存在であって魅力がない、『チャタレー』初稿の主人公パーキンには人間的な点があるが、メラーズは抽象的な存在であって観念的な存在である、という意見がかなりある。たとえば、J・モイナン(J・Moynahan 144)、H・M・ダレスキー(H・M・Daleski 282)、K・セイガー(K・Sager 198)等はメラーズ像に批判的である。つまりこの意見は最終稿にはリアリズムがない、ということである。このような意見は、今までの『チャタレー卿夫人の恋人』研究にかなり大きな位置を占めていると思われる。また、この小説が芸術的に優れているとする多くの研究者の中にも、メラーズの人物像が現実的ではないし、またラグビー邸の森でのメラーズとコニーの逢引は現実からの逃避ではないのか、と批判している人がいる。たとえ

ばS・サンダーズは、最終稿を一番優れているとしているが、メラーズを初めて登場人物はすべて道徳劇の寓意であると考えている。つまりサンダーズは、登場人物を非現実的であると考えているし、メラーズとコニーの愛は逃避であり、ロレンスが願っている文明社会の改革にはならないと、と考えている(Sanders 185)。

しかし筆者は、最終稿には十分リアリズムが溢れており、また森の描写やメラーズの人物像も現実的であると思う。リアリズムについて2点から述べようと思う。

まず、(1) ラグビー邸の森が楽園という非現実的な存在ではなくて、現実的な存在であるということから述べる。ラグビー邸の森がエデンの園に喩えられているという意見があるが、これは間違いであると思う。なぜならまず①ラグビー邸の森には戦争の爪あとが生々しく残っているからである。第一次世界大戦中に塹壕用として森の木々が切り倒され、地面がむき出しになっている箇所がある。次に②としてメラーズは森の獲物を守るために、自分の子供の前でさえも盗人猫を殺して子供を悲しませる。これも生々しい森の中の殺しの場面であり、リアリティックである。更に③として森の中にも炭鉱の機械の音が絶え間なく聞こえてくるし、夜には炭鉱の火が絶え間なく燃えている様子が嫌でも目に入ってくる。その炭鉱というものは、メラーズやコニーにとって醜い存在なのである。メラーズは森が世間から隔離されているということが幻想であることを知っていたのである(LCL 119)。また、④メラーズは、コニーに対して最初は軽蔑的であったり疎ましく思っているし、二人が深い関係になってからも現実の問題(階級間闘争や離婚問題や男女の問題)を話し合ったりして、現実が入り込んできている。最後に、⑤メラーズとコニーの性愛における葛藤が書かれている。

(2) 次に人間関係における大きなリアリズムがある。それは①メラーズの方言と②性愛のタブー語である。先ず方言についてであるが、これは標準英語に対立するものである。標準英語を話す人々の世界は「白い世界」であり既成の価値観の世界である。ロレンスはこの世界を批判している。そして文明社会を批判するロレンスは、自発性と本能の自然世界を賞賛している。方言は、自然

世界と文明社会の橋渡しをするものであると考えられる。精神生活を重視する人々の話す「言葉」を嫌悪したロレンスは、真の言葉として方言を取り入れたと思われる。そして方言というものは決して非現実的なものではなくて、あまりにも現実的なものと考えられる。また、②性のタブー語（4文字語）についてであるが、これは『チャタレー卿夫人の恋人』を裁判沙汰にした一原因であった。しかしタブー語も方言の一種として考えられる。ロレンスは、「『チャタレー卿夫人の恋人』について」において、自分が『チャタレー卿夫人の恋人』で書きたかったことを述べている。それは性から汚れを取り除くことである、と述べている（LCL 334）。そのために世間が汚らわしい、と考えているタブー語を敢て使用して、性が汚いことはないことを証明しようとした。また先の「『チャタレー卿夫人の恋人』について」では、精神が肉体を恐怖しているから、その恐怖心を取り除くために、性に対して真実の敬意と尊敬を払うために、猥褻と言われている言葉を用いるべきだと述べている（LCL 309）。そして1960年に行われた裁判の結果、彼の本は無罪となり芸術であることが公に認められた。彼は勝利したのである。

## 結 論

ロレンスは、対立する二つの要素の均衡を求めている。文明社会を象徴する光を批判しているが、それは現代社会があまりにも光が表わす要素に偏っているためなのである。決して精神世界が必要ない、と言っているのではない。ロレンスは、最終稿において、メラーズの人物像を、本が好きな読書家でありまた紳士のようにあり、標準英語も話そうと思えば話せる男性として、本能的な血と肉を信奉する男性であると同時に精神性も備えた男性として描いている。

冒頭の「悲劇だからこそ生き抜く」というロレンスの戦いの意志は、「『チャタレー卿夫人の恋人』について」に詳しく述べられている。悲劇を乗り越えることは、人間の男女の性愛が天や大地という宇宙のリズムと呼応して活動することである。つまり人間が有機的な生を取り戻すことである。そして『チャタレー卿夫人の恋人』では、悲劇を生き延びるために、現代の機械文明を批判し

て既成の価値観を打ち壊そうとする戦いの思想が主人公のメラーズとコニーの存在のあり方を介して述べられている。この点から、この小説は不倫そのものよりも社会問題と深く絡んだ男女の生き方をテーマとしていると考えられるのであり、他の不倫小説とは異なったテーマを持っていると考えられるのである。ロレンスは「モラルと小説」(*Morality and Art*)というエッセイにおいて“*If a novel reveals true and vivid relationship, it is a moral work, no matter what the relationship may consist in. If the novelist honours the relationship in itself, it will be a great novel.*” (Pp 530) と、真の小説が描く男女関係の価値観は、既成の道徳的価値観に縛られないことを述べている。

更にこの小説は、テーマの重要性とそれを美しい詩的な言葉で表現している作品であることから(代表例：“*The green things on the earth seemed to burn with greenness.*” LCL 22), ロレンスの最高傑作の一つであると思われる。そして、21世紀の今日、機械文明が発達しすぎて人間の生にとって多くの弊害が現れ、拝金主義者が多い今こそ、この小説はますます読まなければならないと思われる。

\* 本稿は名古屋大学英文学会第45回大会(2006年4月15日、於名古屋大学)における口頭発表に加筆・修正したものである。

## 注

<sup>1</sup> 「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」『日本文学全集33 川端康成雪国』(筑摩書房、昭和45年)5頁を参照。

<sup>2</sup> 「我輩は猫である。名前はまだない」『日本文学全集13、夏目漱石(一)我輩は猫である』(筑摩書房、昭和45年)5頁を参照。

<sup>3</sup> “*When in April the sweet showers fall/And pierce the drought of March to the root, and all/The veins are bathed in liquor of such power/As brings about the engendering of the flower,*” (Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales*. London: Penguin Books, 1951; 2003), p. 3. を参照。

<sup>4</sup> 「われ正路を失ひ、人生の覇旅半にあたりてとある暗き林のなかにありき」ア

リギエリ, ダンテ / 山川丙三郎訳『神曲 (上)』(岩波書店, 1952年; 2002年) 13頁を参照。

<sup>5</sup> Lawrence, David Herbert. *Lady Chatterley's Lover & A Propos of Lady Chatterley's Lover* (略号 *LCL*). Cambridge: Cambridge University Press, 1993. (略号 *LCL*) p. 5. 及びロレンス, D. H. 著 / 伊藤整訳, 伊藤礼補訳『完訳 チャタレイ夫人の恋人』(新潮社: 新潮文庫, 1996年) 5頁を参照 (これ以外の本論中の原文訳は山田による)。

<sup>6</sup> Lawrence, David Herbert. *The Letters of D. H. Lawrence Vol. I.* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), pp. 40-1 を参照。

<sup>7</sup> ファーバー, マイケル / 植松靖夫訳『文学シンボル事典』(東洋書林, 2005年) 241-2頁を参照。

## 引用文献

アリギエリ, ダンテ著 / 山川丙三郎訳『神曲 (上)』岩波書店, 1952; 2002。

川端康成『日本文学全集33 川端康成: 雪国』筑摩書房, 昭和45年。

Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales*. London: Penguin Books, 1951; 2003.

Daleski, H. M. *The Forked Flame: A Study of D. H. Lawrence*. London: Faber and Faber, 1965.

ファーバー, マイケル / 植松靖夫訳『文学シンボル事典』東洋書林, 2005。

Lawrence, David Herbert. *Complete Poems*, London: Penguin Books, 1964; 1971. (略号 *CP*)

———. *The First and Second Lady Chatterley Novels*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999 (略号 *FSLCN*)

———. *Kangaroo*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. (略号 *K*)

———. *Lady Chatterley's Lover & A Propos of Lady Chatterley's Lover*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993. (略号 *LCL*)

———. / 伊藤整訳・伊藤礼補訳『完訳 チャタレイ夫人の恋人』新潮社: 新潮文庫, 1996年。

———. *The Letters of D. H. Lawrence Vol. I.* Cambridge: Cambridge University Press, 1979. (略号 *Letters I*)

———. *The Letters of D. H. Lawrence Vol. II.* Cambridge: Cambridge University Press, 1981. (略号 *Letters II*)

———. *The Letters of D. H. Lawrence Vol. IV.* Cambridge: Cambridge University Press, 1987. (略号 *Letters IV*)

- . *The Letters of D. H. Lawrence Vol. V*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.  
(略号 *Letters V*)
- . *The Letters of D. H. Lawrence Vol. VI*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.  
(略号 *Letters VI*)
- . *Phoenix* Ed. E. D. McDonald. London: Heinemann, 1939; 1967. (略号 *Ph*)
- . *Study of Thomas Hardy and Other Essays*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985. (略号 *STH*)
- . *Women in Love*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987. (略号 *WL*)
- 夏目漱石 『日本文学全集13. 夏目漱石 (一) 我輩は猫である』 筑摩書房, 昭和45年.  
新村出編 『広辞苑 第4版』 岩波書店, 1994.
- Moynahan, Julian. *The Deed of Life: The Novels and Tales of D. H. Lawrence*, New Jersey: Princeton University Press, 1963.
- Sager, Keith. *The Art of D. H. Lawrence*, Cambridge: Cambridge University Press, 1973.
- Sanders, S. *D. H. Lawrence: The World of the Major Novels*, London: Vision Press, 1973.
- シュヴァリエ, ジャン&アラン・ケールブラン / 金光仁三郎他訳 『世界シンボル大事典』 大修館書店, 1996.
- トルストイ, L. F. / 中村融訳 『アンナ・カレーニナ (上)』 岩波書店, 1989; 1994.

## Synopsis

*Lady Chatterley's Lover* and Our Age : The Uniqueness of the Adultery Described by D. H. Lawrence  
Akiko Yamada

Adultery is one of the major themes of literature. There are three famous novels which have the theme of adultery in the nineteenth century: *Madame Bovary* by Flaubert, *Anna Karenina* by Tolstoy and *The Scarlet Letter* by Nathaniel Hawthorne, and among the most famous liaison novels written in the twentieth century is *Lady Chatterley's Lover* by D. H. Lawrence. But *Lady Chatterley's Lover* has five major different points from the above three novels.(1) In *Lady Chatterley's Lover* the protagonists Mellors and Connie don't belong to the same class, that is, Mellors belongs to the lower class and Connie belongs to the upper class. But in the above three novels, the heroes and heroines all belong to more or less the same class.(2) In *Lady Chatterley's Lover* the chief protagonist is a man, but in the other three novels the protagonists are women.(3) In *Lady Chatterley's Lover* both protagonists survive, but in the other three novels either the hero or the heroine dies in the end.(4) *Lady Chatterley's Lover* describes sexual intercourse directly which the other three novels do not do.(5) *Lady Chatterley's Lover* describes both protagonists' discord and growth which the other three novels do not do.

The reason why *Lady Chatterley's Lover* presents such a new viewpoint is because the author Lawrence doesn't blame the protagonists' adulterous love but rather praises it. Lawrence didn't write this adulterous novel just as a love story, but as a novel critical of our modern mechanized civilization. The novel has the theme of saving mankind from our modern tragedy, that is, the theme of how to live a truly organic life. In other words it can be said that the novel deals with social problems.

What are the social problems of the modern world which the protagonists are struggling against? What is the tragedy of this age? *Lady Chatterley's Lover* begins with the sentences "Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically.

The cataclysm has happened, we are among the ruins.... . We've got to live, no matter how many skies have fallen." (*Lady Chatterley's Lover*, p. 5.) These opening sentences pronounce Lawrence's firm resolution to survive and live. The setting of *Lady Chatterley's Lover* is the time just after the First World War. Though Lawrence didn't participate in it, he experienced it and suffered from it. He declared himself against the war because in war human beings are treated like a toothed wheel in a machine. Lawrence hated the world dictated only by logic which was like a machine. In the modern age, logic dominates our life. The logical world is that of the mind only. Lawrence thought that if the mind controlled our life too much, human beings would act from hate. And this is what has happened in our age. In *Lady Chatterley's Lover*, the narrator says, "Each man a machine-part, and the driving power of the machine, hate: hate of the bourgeois!" (*Lady Chatterley's Lover*, p. 38.) Human beings have no true connection between each other now. Lawrence thought it most important to return to the organic life, which was to cherish our flesh and blood, and insisted that we should live according to spontaneity and intuition more. In short he wanted the balance between the mind and the body in our life, which means that he advocated dualism.

In *Lady Chatterley's Lover* there appears a person who belongs to the ruling class. His name is Sir Clifford Chatterley, Connie's husband. He becomes sexually impotent because he was injured in the lower half of his body during the First World War. Clifford lives surrounded by the world of machinery, which Lawrence depicts as "the white world," meaning the world of logic, mind and the words of Christianity. Young Connie suffers in a non-organic life without true sexual intercourse. She is vulnerable, sensitive and tender like the many beautiful flowers and trees growing in the forest of Rugby.

But Mellors, who is the gamekeeper in the Rugby's forest, rescues Connie from her non-human life. He is depicted as "a dark man," who criticizes the established moral principles and tries to create a new world where there is a true connection between man and woman, man and man,



ruling class and laboring class. Mellors comes from the lower class and is an employee of Clifford. Connie being attracted by Mellors' tenderness to her femininity, which other men don't show, decides at the end of the novel to leave the Rugby Hall, after which the reader expects there will be the hope of the protagonists' marriage in the near future.

*Lady Chatterley's Lover* doesn't avoid realistic problems and it isn't just an allegorical novel as is often said. The Rugby forest is not a paradise but is rather a realistic place, I think. Mellors uses dialects and acts cruelly to kill a cat which tries to steal game in the forest. These are realistic aspects in the novel. Besides, from the forest the fire of ugly collieries can be seen and the sulphurous smell is carried into the forest on the wind. This is another realistic point in the forest.

As I mentioned above, by depicting the protagonists' survival, Lawrence criticizes the modern machine world, and the tender sexual love saves it from tragedy. Therefore *Lady Chatterley's Lover* is a novel which has the theme of struggling against the modern evil. And in this point the novel is different from the other novels with an adulterous theme.